

平成 16 年度

第 1 回 東京都高等学校体育連盟

研究大会 紀要

(土)



期日 平成 17 年 2 月 26 日

会場 東洋高等学校

主催 東京都高等学校体育連盟
後援 東京都教育委員会
主管 東京都高等学校体育連盟研究部
協力 東洋高等学校
協賛 株式会社 クレーマージャパン
学校法人 竹早学園 竹早教員保育士養成所

目次

目次	1
大会日程	2
あいさつ	3
大会役員	4
開催要項	5
講演	6
「アンチ・ドーピング」	
～健康とフェアプレーを守るために～	
(財)日本陸上競技連盟 医事委員 野田 晴彦	
研究発表	
「高校の部活動での競技力の向上」	1 0
～東京都立野津田高校ボクシング部での実践～	
ボクシング専門部 都立南平高等学校 山崎 哲男	
「サーブ動作における肩筋肉の活用と練習法についての若干の考察」	1 4
テニス専門部 都立小金井工業高等学校 家弓 明丈	
「空手道競技の安全対策について」	1 8
～東京都空手道専門部の取り組み～	
空手道専門部 目黒学院高等学校 山下 和秀	
「フェンシング競技における部員確保とその問題点」	2 2
フェンシング専門部 藤村女子高等学校 道山 京子	
「東京都におけるユースサッカーリーグの実践報告」	2 6
～DUOリーグの創設(1996)から公認リーグ準備過程(2004)まで～	
サッカー専門部 筑波大学附属高等学校 中塚 義実	
全体講評	3 2
研究部規約	3 3
研究部 組織と名簿	3 4

大会日程

<<開会式>> 14:30～14:45
1. 開会のことば 東京都高等学校体育連盟研究部部長 佐治 恒孝
2. あいさつ 東京都高等学校体育連盟会長 鳴海 靖郎
3. 祝辞 東京都教育委員会 教育庁指導部主任指導主事 三田 清一
全国高等学校体育連盟会長 天沼 照夫

<<講演>> 14:45～15:45
「アンチ・ドーピング」～健康とフェアプレーを守るために～
(財)日本陸上競技連盟 医事委員 野田 晴彦
(質疑応答)

<<研究発表>> 15:45～17:25 各発表15分 質疑応答
5分

<競技力の向上>

「高校の部活動での競技力の向上」

～東京都立野津田高校ボクシング部での実践～

ボクシング専門部 都立南平高等学校 山崎 哲男

「サーブ動作における肩筋肉の活用と練習法についての若干の考察」

テニス専門部 都立小金井工業高等学校 家弓 明丈

<健康と安全>

「空手道競技の安全対策について」～東京都空手道専門部の取り組み～

空手道専門部 目黒学院高等学校 山下 和秀

<部活動の活性化>

「フェンシング競技における部員確保とその問題点」

フェンシング専門部 藤村女子高等学校 道山 京子

「東京都におけるユースサッカーリーグの実践報告」

～DUOリーグの創設(1996)から公認リーグ準備過程(2004)まで～

サッカー専門部 筑波大学附属高等学校 中塚 義実

<<全体講評>> 17:25～17:35
東京都教育委員会 教育庁指導部指導企画課統括指導主事 鯨岡 廣隆

<<閉会式>> 17:35～17:40
1. あいさつ 東京都高等学校体育連盟理事長 佐藤 幸夫

<司会者> 東京都高等学校体育連盟事務局長 阿部 正彦



研究大会にあたって

東京都高等学校体育連盟

会長 鳴海 靖郎

東京都高等学校体育連盟の記念すべき第1回研究大会が、東京都教育委員会の後援をいただき、盛大に開催する運びとなりました。ここに至る関係各位の並々ならぬご尽力に心より感謝申し上げます。

全国高体連の39回をはじめとして、各県高体連研究大会がそれぞれ歴史を刻んできた中で、本連盟としての第1回研究大会については、意外な印象をお持ちの方も多いことでしょう。要因として、平成12年度まで全国高体連と東京都高体連は一体であり、直接、全国研究大会の開催・運営に携わってきたことを挙げる事が出来ます。ただし、研究発表については、他県同様に、各専門部のご努力により実績を重ねてきたところです。

平成13年度、全国高体連の財団法人化に伴い、都高体連は事務局を都立駒場高校に移し新たな活動を開始しました。この年、早速本連盟研究部としての規約策定にとりかかり、規約は翌平成14年度の総会（理事・評議員会）で承認され、活動の基盤を整えることが出来ました。そして昨年度は、研究部として全国大会への研究発表に勤しむ中、都高体連としての第1回研究大会開催要項（案）を作成・検討するまでに到りましたが、日程調整等により見送らざるを得ませんでした。この様な経緯と先達のご努力が実り、第一回の研究大会を迎えることは、誠に感慨深いものがあります。

ところで、高等学校における部活動に関する様々な調査結果に共通しているのは、部活動が多く为学校で重要な教育活動として位置づけられていることです。本より「21世紀を切り拓く心豊かで逞しい日本人の育成」が求められており、部活動は、その具現化に当たって大きな役割を担っているものといえます。

一方、勝利至上主義的指導、部活動離れならぬ部活動離し、少子化への対応等の諸課題も提起されて久しく、外部指導者や地域との連携、部活動指導に関わるサービス上の改善、部活動を支える都高体連事務局の在り方等も緊急的な課題となっております。この様な状況の中で、本研究大会の競技力向上、健康と安全、部活動の活性化の3分科会において、ともに部活動に関する実践的な研究成果を挙げていくことが、都高体連にとって何よりも肝要であると考えているところです。

おわりになりますが、改めて、後援者である東京都教育委員会、研究部の規約策定にご尽力いただいた小久保敦央氏、全国大会での発表の傍ら都研究大会への機運を高めていただいた日下修次氏、そして第1回研究大会の実施にご努力いただいている草木繁生副理事長をはじめ、ここまでに至る多くの関係者の皆様に深甚なる感謝を申し上げますと共に、本大会が実り大きく、且つ次回以降の更なる充実を心より祈念し挨拶といたします。

平成16年度

第1回 東京都高等学校体育連盟研究大会 役員

会 長 鳴海 靖郎

副会長 武田 昭二 甲田 充彦 村井 信彦 佐藤 幸夫

参 与 恩田 実 神津 秀晃 齋藤 元治 中川 惠

各専門部部長

委員長 佐治 恒孝

副委員長 草木 繁生 田中 茂好

委 員 阿部 正彦 矢野 一心 松田 宣之 家村 誠也 中塚 義実

中島 昭雄 松原 通雄 内海 秀一 柳 清司

運 営 役 員

総 務 草木 繁生

総務員 田中 茂好

涉外・接待 阿部 正彦 矢野 一心

紀要・報告 中島 昭雄 松原 通雄

会場・記録 松田 宣之 家村 誠也

受 付 柳 清司 内海 秀一 田中 茂好

司会者 阿部 正彦

発 表 中塚 義実

平成 16 年度

第 1 回東京都高等学校体育連盟研究大会

開 催 要 項

- 1 趣 旨 東京都高等学校体育連盟に加盟する各専門部の体育・スポーツ指導者の資質向上を図るために日ごろの研究、指導の成果を発表するとともに高体連の直面する諸問題について情報交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興発展に資する。
- 2 主 催 東京都高等学校体育連盟
- 3 後 援 東京都教育委員会
- 4 主 管 東京都高等学校体育連盟研究部
- 5 期 日 平成 17 年 2 月 26 日 (土) 午後 2 時 30 分～午後 6 時 00 分
- 6 会 場 東洋高等学校 〒101-0061 千代田区三崎町 1-4-16
TEL 03-3291-3824 FAX 03-3291-3827
JR「水道橋」駅より 徒歩 1 分
- 7 参 加 者 東京都高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者
- 8 内 容 (1) 全体会 5 テーマ
「競技力の向上」 (競技力) 2 テーマ <テニス><ボクシング>
「健康と安全」 (安 全) 1 テーマ <空手道>
「部活動の活性化」 (普 及) 2 テーマ <サッカー><フェンシング>
(2) 講 演
※各発表テーマ・講演内容は、<http://www.tokyo-kotairen.gr.jp>に掲載します。
- 9 時 程 1 3 時 3 0 分 受付
1 4 時 3 0 分 開会式
1 4 時 4 5 分 講演
1 5 時 4 5 分 発表 発表 1 5 分 質疑応答 5 分とする。
1 7 時 3 0 分 閉会式
- 10 参加申込み
①参加申し込みは、所定の用紙に必要事項を記入の上、各専門部で一括して申し込む。
申込期限 平成 17 年 2 月 10 日 (木) 必着
②各専門部 (各競技種目団体) を通さず、個人での参加を希望する場合、下記の申込先まで、氏名・性別・学校名・関係競技種目・連絡先等を記載し、FAX で、2 月 15 日 (火) までに申し込む。

申込先 〒184-8581 東京都小金井市本町6-8-9
都立小金井工業高等学校内 草木繁生

Tel 042-381-4141
FAX 042-382-8130

講 演

「アンチ・ドーピング」

～健康とフェアプレーを守るために～



財団法人 日本陸上競技連盟 医事委員 野田晴彦 医師

<略歴>

1957年3月8日兵庫県生まれ。
東京大学医学部卒業。
財)日本陸上競技連盟医事委員。

86年ソウル・アジア大会、91年シェフィールド・ユニバーシアード大会等の
JOC本部ドクター。

陸上競技では、97年プサン・東アジア大会、2001年ブルネイ・アジアジュニア選
手権、01年エドモントン世界選手権、02年ジャマイカ・世界ジュニア選手権、03
年シアールブルク・世界ユース選手権のチームドクター。

専門は、公衆衛生とスポーツ医学(内科)。

健康志向から競技者まで、健康管理からトレーニング、ドーピングコントロール

までの幅広いメディカルサポートを目指している。

アンチ・ドーピング …… 健康とフェアプレーを守るために …

…

2005年2月26日

日本陸上競技連盟 医事委員 野田晴彦

1. アンチ・ドーピングの歴史

(1) IOC (国際オリンピック委員会)

オリンピック大会のドーピング汚染

蛋白同化剤の乱用、興奮剤による死亡事故 … 1964年スポーツ会議でアンチ・ドーピング決議

ドーピング検査の実施 : 1968年グルノーブル、メキシコ大会より

金メダルを巡る … ミュンヘンオリンピック (水泳: エフェドリン)

主な事件 長野オリンピック (スキー/スノーボード: 大麻) 剥奪せず

シドニーオリンピック (体操: プソイドエフェドリン)

ソルトレークシティーオリンピック (スキー: エリスロポエチン)

(2) IAAF (国際陸上競技連盟) / JAAF (日本陸上競技連盟)

日本での競技会検査 : 1980年8カ国陸上より

競技外検査 : 1993年9月30日より

(3) WADA (世界アンチ・ドーピング機構) / JADA (日本アンチ・ドーピング機構)

WADA: 1999年設立 シドニーオリンピックより活動

2004年世界アンチ・ドーピング規程 : アテネオリンピック参加に義務付け

JADA: 2001年設立 日本国内の統括、調整機関

ドーピングコントロールオフィサー (DCO) の養成

(4) スポーツ仲裁機構 (ICAS 1996年 / JSAA 2003年)

問題の迅速な解決を図る … アトランタオリンピックより参加に義務付け

2. ドーピングを巡る社会の動き

(1) スポーツと薬物乱用

競技力の向上目的 : 一時的 … 興奮剤、麻薬性鎮痛剤、利尿剤、隠蔽剤、など

身体改造 (トレーニング期間) … 蛋白同化剤、ホルモン類、など

ドーピングの定義 … その物質または方法が、以下の3条件のうち2つ以上を満たすとき

- ①競技能力が強化される、その可能性がある
- ②健康上の危険がある、その可能性がある
- ③スポーツ精神に反すると認められる

禁止物質・禁止方法の使用が隠蔽される可能性がある

(2) 社会と薬物乱用

非合法、脱法薬物 … 麻薬、大麻、覚醒剤、向精神薬、など：法的規制
 依存性の強い物質 … タバコ、エチルアルコール、など
 乱用されやすい薬物 … 総合感冒薬、蛋白同化剤、など
 規制するルールがなければ、必ずエスカレートして深刻な問題を引き起こす

(3) クリーンな社会とスポーツを目指して

クリーンであることは、スポーツの存在意義に関わる
 スポーツは、クリーンなメッセージを社会に送ることが出来る
 「健全な身体」は「健全な精神」が宿ってこそ守られる
 アンチ・ドーピング活動とドーピング検査は、スポーツにクリーンな土台を提供する

3. ドーピング検査の実際

(1) 競技会におけるドーピング検査（競技会検査）

ドーピング検査を行う競技会は、クリーンな競技会である資格を持つ
 競技会のステイタスを決めると考える … トップ競技者では受けなければ恥ずかしい
 競技運営の一部として組み込むことが望ましい
 F1レースのように主催者（FIA）が予告なく実施することもある

検査は現在尿検査（75ml）、採尿・密封して検査機関（三菱化学 BCL）に冷蔵で送付
 検査作業は、すり替えなどの不正操作が入り込まないように、セキュリティを確認する
 本人の尿であることを、同性のオフィサーがトイレに入って直接見て確認する
 検体操作は原則として本人が行い、競技者の同伴者は手順を確認する
 結果の通知方法は検査実施組織によって異なるが、異常所見があれば文書で通知される

(2) トレーニング期間のドーピング検査（競技外検査）

これからのドーピング検査では、比重が重くなる
 主にトップクラスの競技者を対象にする … 効率の問題、居所情報の管理など
 本当はどのレベルであっても、ドーピングのリスクは大きな差がない

(3) ドーピングコントロールオフィサー

日本国内の資格 : JADA養成 DCMO・DCTO が原則的に実施する
 各競技団体に、約 280 人（2004 年 3 月）

(4) アンチ・ドーピングの理念

スポーツ選手の健康と安全を守る

ドーピング検査によってしか、競技者がクリーンであることを証明できない

第三者から見て不正の疑いのない、国際標準のドーピング検査を行う

4. 身近なアンチ・ドーピング活動のために

(1) ドーピングのリスク（誘惑）は多い … 今までの違反例はさまざま
好奇心から : 非合法薬物、興奮剤

向上心から : トレーニング理論、蛋白同化剤、ホルモン類、

勧められて : ジム、指導者、仲間、親族

うっかり : 総合感冒薬、健康食品

知らずに : 指導者から、組織的に、強制的に

(2) 安易な薬物の服用は、うっかりドーピング違反の温床

口に入るものの区別 … 成分表示

食品・飲料・健康食品・特定保健食品・医薬部外品・医薬品

薬剤の使用はドーピングの判断して行い、記録を正確に所持しておく

(3) 即効性を求める心理は、弱さの象徴

効果が実感できるということは、薬理作用があるということ

短期間で「薬」より効く食品があることはおかしい

即効性を演出するのは、カフェインなどの興奮剤

サプリメントは規制が甘い分だけ、禁止物質の汚染や意図的混入の危険がある

長期的なトレーニングに、目標、見通し、自信を持つこと

(4) Play Fair, Play True

「違反競技者と同じ競技場に立ちたくない」プライドを持つ

1. 指導者の心構え

高校の指導者として大切なことは、ボクシングを通じて、何を教え、どのように育てていくかを明確に持つことである。勝利を目指し、技術指導するのは当然であるが、部活動でまず目指すのは人格の育成であり、「勝ち、負け」以上に人として大切なことを教えていかなければならないと思う。それが、学校教育の中の部活動であり、それなくして競技力の向上はあり得ない。競技力の向上を目指すためには、日常生活をきちんとさせる、学校生活を第一優先とし、学校の規則を守らせる等生活指導を徹底し、また、学習にもきちんと取り組ませる。さらに、礼儀を重んじ、人に感謝するなど、人として大切なことを日常の部活動で教えながら、競技力の向上を図る。

2. ボクシングの特性

- (1) 初心者と経験者が同じ練習ができない。
- (2) 攻撃と防御技術は一体である。攻撃しながら防御し、防御しながら攻撃する。
- (3) 恐怖心との戦いである。

3. 競技目標

- (1) 部の目標
最終目標は全国優勝であり、それを目指し3年のスパンで目標を設定した。
創部～3年 部としての形の完成
4年～6年 関東大会出場、全国大会出場
7年～9年 関東大会、全国大会上位進出
9年～ 全国大会上位常連校、全国優勝
- (2) 部員3年間の目標
1年生 基本の習得、体力育成、学年別大会優勝。
2年生 関東大会出場、全国大会出場、東京都新人戦優勝、戦術を考えての試合運び。
3年生 関東大会優勝、全国大会優勝、戦術の徹底。

4. 練習計画

- 総体予選を第一優先に考慮し、1年間を試合期、試合準備期、体力・基本技術期に分けて、練習内容を立てる。
- 4月～ 7月 2、3年生試合期 実戦練習（マスボクシング、戦術の練習、長所を徹底に伸ばす個々の練習）
 - 8月～11月 1年生が7、8月頃より同じ練習内容になる。
 - 1、2年生の試合期 実戦練習
（4月～7月の試合期とは異なる内容、マスボクシング、基本練習の徹底）
 - 12月～1月 体力・基本技術期 体力トレーニングの割合が高い。基本技術の確認。基

本技術を用いた体力アップの練習

2月～3月 試合準備期、技術トレーニングの割合を高くしていく。基本技術のみを用いた実戦練習。

1週間の計画は、平日は放課後、朝の練習、休日は遠征をし、休みは基本的にはないが部員の状況を判断して適宜休みとした。また、大学が近隣にあるため平日の放課後も大学に出向いた。

5. 練習方針

- (1) 上級生が順番に1年生の指導をする。上級生は自分の練習時間をとられるが、指導できることは、技術を理解していなければできず、基本の復習、再確認ができ効果があったと思う。また、私自身も、4月から7月までの試合期に2、3年生の指導に専念できた。
- (2) マスターできなくてもよいとの考えで、様々な技術をどんどん教える。新しい技術を教えることによってマスターできなかった技術ができるようになったり、基本の確認につながったりする。また、全体的に技術が低くても、ある技術について抜きん出るものもある。
- (3) ひとつの技術を教えるのに、様々な方法、角度から教え、同じ練習内容を長くやらない。飽きてしまったり、マンネリ化することを防ぐためである。
- (4) 練習内容の目的、意味を簡潔にかつ明確に説明し、理解させる。このことが実際には大変難しい。目的・意味を理解させないと、部員は考えずにやってしまう。
- (5) ボクシングを単純に考えさせる。
- (6) 長所を延ばす。個人の能力差があるため、短所にあまりこだわらない。
- (7) 個人の能力、特徴を出来るだけ早くに見抜く。個人によってある技術が大学になってから伸びるもの、今教えれば伸びるものと様々である。
- (8) 強制させる練習と自由に考えさせて行わせる練習に分ける。
- (9) 練習で大切なことは基本である。実践練習等様々な練習の中に、必要に応じて必ず基本練習を取り入れる。
- (10) 遠征では、他校の練習を観察し、他校の指導者にアドバイスをもらうようにする。
- (11) 合同合宿、練習会では、自校の選手は指導しない。他校の指導者の指導をうけさせる。さまざまな指導を通じて考えさせる。また、私に教わりたいという意欲を喚起することにもつながる。

6. これまでの足跡

- (1) 創部～5年くらいまで
他校に追いつくためかなりハードな練習であった。練習量は、他校の3、4倍以上であった。下校時刻もボクシング部にはなかった。朝練習では、陸上長距離のようなロードワークをかなりやっていたため、やめるものが多かった。一斉練習がほとんどであった。
- (2) 5年～8年
関東大会、全国大会に毎年出場するが、上位の壁を突破できない。退部者も多くなり、一時期1名の時もあった。全国大会上位の壁をのり越えるため、試行錯誤が続く。このころより指導方法を変え、個人練習を取り入れ始めた。全国大会常連校になり始める。メンタルトレーニングの必要性を強く感じ、導入し始めるが、時間的制約と、指導の難しさとで長く続かなかった。
- (3) 9年～
充実した時期を迎える。個人に課題を与えるなど個人練習の割合が増え、試合の戦術に関する練習も増えた。個々に考えさせるようになってくる。

7. まとめ

- (1) 学校の特色、生徒のレベル等によって、指導方法は変える必要がある。

- (2) 競技力の向上には、自校だけでなく、東京都全体の底上げが必要である。
- (3) 指導者自身が常に、様々なことを学んでいかなければならない。
- (4) 世界のトップ技術、指導方法の情報を入手し、取り入れていく。
- (5) 基本をおろそかにして、競技力向上はない。
- (6) メンタルトレーニングの必要性を強く感じる。

資料 1

ボクシング部礼儀作法

1. 挨拶

- ・練習、試合、遠征、学校内では、先生方、先輩に会ったらきちんと挨拶をする。
- ・気をつけの姿勢をし、挨拶する。
- ・大きな声で挨拶する。

2. 入退室

- ・ノック2回し、おじぎをする。
- ・「失礼します。おはようございます。（こんにちは）」
- ・「ボクシング部〇年〇〇ですが、〇〇先生、いらっしゃいますか。」
不在の時・・・「〇〇先生は、どちらにいらっしゃいますか。」
在室の時・・・用件を話す。
- ・話し終わったら、先生におじぎをし挨拶する。（ありがとうございました。願います等がいい、失礼します。）
- ・挨拶が終わったら、ドアの前で「失礼しました。」、おじぎをして、退室する。

3. 体育科に道具をとるとき

- ・ノック2回し、おじぎをする。
- ・「失礼します。おはようございます。（こんにちは）」
- ・「ボクシング部〇年〇〇ですが、道具を取りに来ました。」
- ・挨拶が終わったら、ドアの前で「失礼しました。」おじぎをして、退室する。

4. 道場の入退室

- ・必ず、道場におじぎをする。
- ・先輩などがいるときは、「こんにちは、おはようございます。」
- ・早退するときは、「お先に失礼します。」

5. 練習中

- ・練習開始は、整列して「こんにちは、お願いします。」アドバイスを受けたら、「練習お願いします。」円陣を作りみんなで声を出す。
- ・練習終了後は、整列して「お願いします。」、アドバイスを受けたら「ありがとうございました。」
- ・先輩、OB、先生が来たときは、きちんと挨拶する。
- ・先輩、OB、先生に道具をつけてもらったり、アドバイスを受けたるときは、「おねがいします。ありがとうございました」
- ・声だしは、大きな声で行う。

6. 遠征

- ・道場入室するときは、きちんと整列して。「こんにちは、おねがいします。」
- ・終了後は、他校の先生の所に行き「一言、お願いします。ありがとうございました。失礼します。」
- ・道場を退室するときは、きちんと整列して「ありがとうございました。失礼します。」
- ・スパarring終了後は、相手の所に行き、「ありがとうございました。」アドバイスを受ける。その後で、先生の所に行く。
- ・服装は、必ず制服

7. 試合

- ・道場入室するときは、きちんと整列して。「こんにちは、おねがいします。」
- ・他校の先生が来たときは、きちんと挨拶する。
- ・OB、先生が来たときは、すぐに集合し、OB、先生を呼びに行く。
- ・試合終了後は、相手の所に行き、「ありがとうございました。」アドバイスを受ける。

その後で、先生、OBの所に行く。

- ・道場を退室するときは、きちんと整列して「ありがとうございました。失礼します。」
- ・服装は、必ず制服

8. 練習道具・道場

- ・道具を大切に使うこと。道具を大切に作る心から、すべての礼儀が始まる。
- ・整理整頓
- ・道場には、ゴミ、ちりがひとつもないようにする。

9. 合宿・遠征合宿

- ・食事、風呂等あがるときは、「お先に失礼します」
- ・他校の生徒と話すこと。

ボクシングの技術以上に、人の心を学びなさい。

資料 2 東京都立野津田高校ボクシング部戦績

平成	関東大会	インターハイ	全国選抜大会	
元年				ボクシング部創
3年	1名出場	1名出場ベスト8		
4年	1名出場	1名出場		
5年	1名出場		1名出場	
6年	3名出場 3位3名			
7年	1名出場 2位	1名出場ベスト1		
8年			1名出場	
9年	5名出場 3位4名	2名出場		
10年度	4名出場 3位1名	2名出場ベスト1 6	2名出場 2位1 名	東京都高校選手 権
11年度	3名出場 2位1名 3位1	2名出場ベスト8		
12年	2名出場 3位1名		1名出場	南平高校へ異動
14年		1名出場		
16年	1名出場 3位	1名出場		

研究発表

サーブ動作における肩筋肉の活用と練習法 についての若干の考察

東京都立小金井工業高等学校 家 弓 明 文

I. 初めに

テニスにおいてサーブの重要性は、言うまでもない。これまで多くの研究がなされ、練習法も考えられてきた。ここでは、サーブについて、亜細亜大学テニス部監督の 堀内昌一助教授の練習法を基本として、高校生にどう具体化していくかを考えてみたい。このところ、堀内助教授は、全国に、サーブ練習法伝授の行脚を続けておられ、数々の著作をものにされているが、ここでは、もっとも簡便に、『Tennis Classic break 2004年10月号付録[強豪校&有名クラブの練習法]究極の練習法いいトコ取り!』P28 亜細亜大学流サーブ矯正法 から考えてみたいと思う。

サーブ動作も、基本的には野球の投球動作の肩の使い方から来ていると考えられる。下の写真は投球動作の例であるが、左から2枚目・3枚目の肘を高く張って、上腕と下腕を直角にして、肘を下げないで、腕を押し出すようにして、ボールを前に飛ばすと考えられる。



しかし、亜細亜大では、“手の平が自分の頭の方に向くようにボールを持ち、ボールを前に投げるに従って、手の平を正面→外側へと回転させる”(プロネーションを身につける)とする。野球も基本的には、同じであると思われるが、上記4枚目のように遠くへ飛ばすことを考えると、肘を前に押し出すようにするところは、亜細亜式と異なると思われる。つまり、亜細亜式では、“プロネーションを身につけるポイントは、肘を90度にたもったままボールを投げること”(ひじの90度をたもつ)と言うことになる。

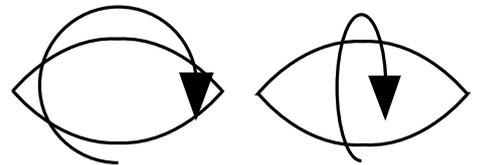
ここで、その例を見てみよう。



このような、肩の使い方は、普段、あまりしていないので、正確に動作の要領を覚えて、反復練習をする必要がある。野球出身の子は、初めからできている子もいるが、最近では、多くが野球未経験者である。また、テニスボール投げを繰り返すことで、“筋肉トレーニング”も兼ねることができる。目的すら意識させずに「腕立て伏せさえすれば筋トレ」と思っている指導者が多すぎるのではないかと。そして、亜細亜大学の堀内監督の考案では、軽いメディシンボールを使って、更に負荷を掛けて肩の動きを意識するようにすると良い、という。



プロネーションの動作ができていないかの判断に、アメリカンフットボールをこの動作で投げるといふことも、考案されている。アメリカンフットボールを、肘を前に押し出すような肩の使い方で投げると、ボールは、楕円の長軸の縦回転（図左）になってしまっていて、遠くへ飛ばない。楕円の短軸の横回転（図右）がかかるようにして、遠くへ飛ばす練習をすることによって、肘を下げず、ボールを投げる“コツ”を会得する。早い子は、5分で覚えるが、何ヶ月もかかる子もいる。急激に練習を繰り返すと、肩や肘を痛める等、故障することもあるので、毎日、少しずつやるのが良い。高校入学まで、ほとんど肩を使わなかった子には、特に注意を要する。



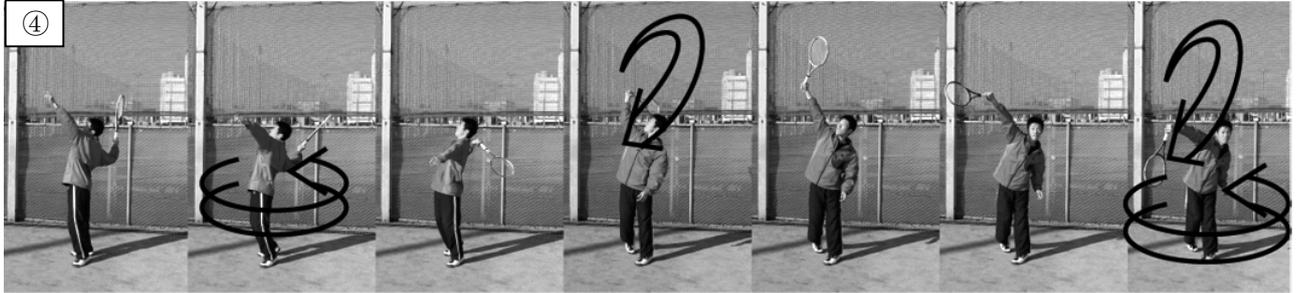
ここまで進んできたら、いよいよラケットを使って、この肩の動きを実践するわけであるが、初心者は、ラケットを持つと肩の事は忘れてしまうので、ボールを強く打つことより、①の写真のように肩の動きを意識して、ボールを投げるときのようにできることを、まず、第一に考えて練習させることが重要である。



②の1枚目の写真のような状態で、身体の前方に普通のトス（ボールを打つ位置に投げる）をしようと、肘が伸びてしまっていて違う動きになりやすいので、自分の身体の右側にトスし、打つ。①の3枚目の写真のように、肘が自分の身体の正面に来ないようにしないと、肘が伸びてしまう。肘が伸びると手首を握ねて、ボールを何とか前に当てようとしてしまう。この動きを会得したら、手首→肘→肩→腰→膝→足とだんだんと、動作を広げていって、大きな動作でサーブをする事を、練習していく事になる。大きな動作に移っても注意点は、①の2枚目の状態で、脇を締め肘が下がらないようにする＝（ひじの90度をたもつ）である。90度をたもてないと、肘、腕が内側に曲がり、回旋運動ではなく、折りたたんだ肘を広げ、手を上に伸ばす動作で打つ、直線的な運動になってしまっていて、プロネーションの動きが身に付かない。③の写真のように、肘は下げないが、ラケットヘッドをしっかりと落として、肘を中心とした回転運動にすることが大切である。更に、④の写真の



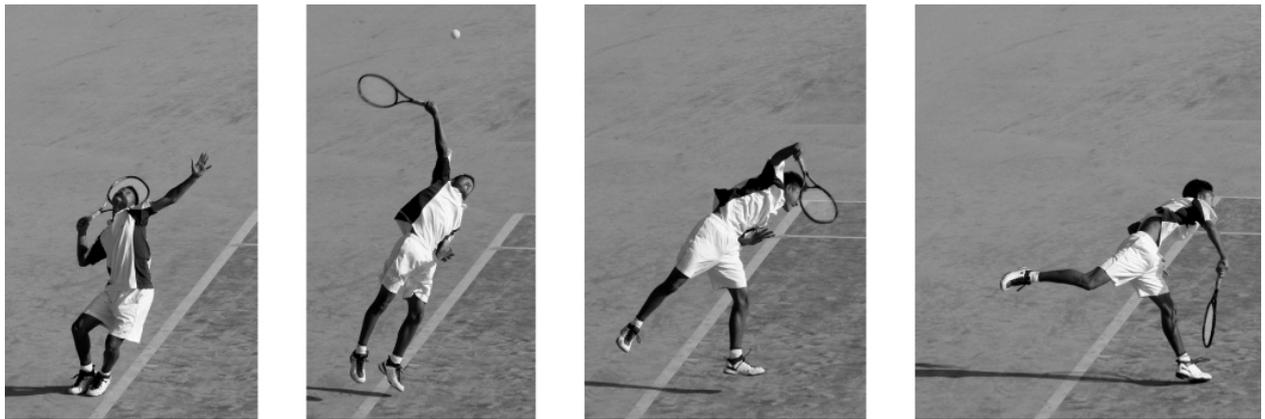
ように腰の回旋運動も入れて行く。腰の回旋方向と肘を中心としたラケットヘッドの回転運動が矢印の関係になることを良く理解させ行うことが大切である。この時、「コンチネンタルグリップ」(ボレーのグリップ)で持たせ、ラケットの動作方向より左方向にスピンのかかった状態でボー



ルを飛ばすことが重要である。グリップを誤ると、ボールが打球方向に飛んでしまうことになって、誤った動作を覚えるきっかけになってしまうので、注意が必要である。又、肘の90度をたもったまま、ラケットヘッドをできるだけ下に向けようとしても、肩の可動域が狭く、ラケットヘッドの動きが短くなってしまいう子がいるが、注意してもすぐには広がらないうえ、故障にもつながる。気長に可動域を広げるストレッチを繰り返して、大きくしていくしかないと思われる。

II. 競技上のサーブの実際

それでは、実際の試合での、日本の Jr.選手のサーブ動作はどうであろうか？以下、関東選抜大会における選手の動作を、見ていこう。下は日本のトップ Jr.選手のサーブ動作である。肘を高く上げて、ラケットヘッドが落ち、これから、プロネーションに移る過程がよく現されてお



り、ダイナミックで、無駄のない動きである。デュースコートからのサーブなので、ラケットの打球方向より左方向にボールが飛ばされていることも良く分かる。



この選手も全日本トップクラス Jr.である。この写真では、プロネーションの様子がよく分か

る。インパクト時に若干肘の位置が低い。これが両者の違い、とは一概に言えないが、前者の方が、力強いように見える。



この選手の場合には、トスが真上に行っている。グリップも厚い。その為、最高点で、肘が伸びきってしまっていて、プロネーション動作が、うまくいっていない状態を現している。初めに、ラケットを担ぎ上げたときから、身体が伸びてしまっていて、身体全体の回転をうまくボールに伝えられていないと言える。正面から見てみよう。次のような例は、どうであろうか。



この選手はプロネーション動作、身体の回転動作は大変良いが、1枚目、右肘の位置が下がってしまっている為、2枚目、ラケットが自分の身体より、後ろに行ってしまう。その結果、3枚目の写真で、肘が下がって、ラケットが持ち上げられず、自分の身体を右に引っ張らないと、ラケットが挙がらない。そして、身体を伸ばす動作の途中でボールとのインパクトをむかえているために、最初の選手と比較すると打球方向にボールが飛んでしまっている。身体が伸びるような動きを習得すれば、更に速いサーブが打てる可能性がある、と思われる。

Ⅲ. 結論

テニスの技術で、サーブだけが唯一、自分の好きなタイミングで好きな位置にボールをあげて打つことのできる技術である。(サーブ以外で自分の打つボールは、相手が打ったボールである) 実際、試合でもサーブゲームのキープが重要とされている。20年前位のテニスでは、トップスピンサーブは主にセカンドサーブに使われ、ボールに回転を多くかけ、スピードよりもまずサーブコートに入れることを重視していた。しかし、現代のラケットの進歩により、ストロークにおいては誰でも簡単に攻撃的なトップスピンが打てる時代になった。その進歩によって、サーブ技術も入れることから、最初の攻撃的なストロークの意味合いがより強くなってきたと言える。今やサーブは“最も高い位置で打てる攻撃的なトップスピンである”、と言えるかもしれない。力のないジュニア・女子でも、トップスピンサーブの打てる可能性は高く、選手の大型化も進んだ世界の女子のトップは、200キロのスピードを早くも超えてしまっている。従来の、スライスサーブ、と呼ばれていた技術も、単にラケット面でボールを擦って、サイドスピンさせるのではなく、基本的には、「プロネーション」によるスピンの当て方の変形として、打つようになっていかないと、試合で通用しないサーブになってしまうのである。このような点からも、ここで紹介した、「プロネーション」の技術が現代の競技テニスの上で持つ意

味は大きい、といえるのではないか。

参考文献 Tennis Classic break 2004年10月号付録[強豪校&有名クラブの練習法]究極の練習法

研究発表

空手道競技の安全対策について

～東京都空手道専門部の取り組み～

目黒学院高等学校 山下和秀

1 はじめに

空手道とは、有形無形の試練を乗り越え練磨の汗の中から人格完成を図る武道である。

空手道競技には、形競技・組手競技の2種類がある。

形競技は、敵を想定し空手の基本技を組み立てて技の攻防を演武する。選手はその演武の中に「技の緩急・力の強弱・体の伸縮」を表現し点数化され順位を決定する。

組手競技は、手技・足技を使い「急所寸前で止める」ことをルールとし技を競う。なお、高体連ルールでは怪我防止のため防具の着用（メンホー、拳サポーター、胴プロテクター、マウスピース、男子のみフェールカップ）が義務付けられる。

この空手道競技において都より輩出した選手たちは、関東大会・全国大会で輝かしい実績を誇っている。

世田谷学園は平成15年度および平成16年度インターハイ男子団体組手でみごと2年連続優勝。

平成15年度インターハイ女子個人形では帝京高校の宇佐美選手、平成16年度インターハイ男子個人形では世田谷学園の新井選手がそれぞれ優勝している。

東京都空手道専門部に加盟している高校は毎年40余校である。うち都立は10校から15校の加盟がある。

さて、今回は特に組手競技（高校生では階級別なし）における安全対策について東京都空手道専門部の取り組みを紹介する。

2 組手競技における傷病・疾病について

平成15年度および平成16年度の都高体連競技大会「救護記録」より、競技中の傷病・疾病などで医師の救護が必要だった件数について調査結果を以下の表に示す。

<発生件数>

	春（個人戦）	春（団体戦）	全国予選	秋（個人戦）	秋（団体戦）	計
--	--------	--------	------	--------	--------	---

15年度	9	14	17	15	14	69
16年度	8	4	9	14	17	52

<内訳>

	鼻血	打撲顔	打撲手	打撲足	打撲体	骨折	その他
15年度	9	16	11	9	3	5	16
16年度	14	11	5	4	9	0	9

「その他」の内訳 捻挫、突き指、切り傷、靭帯を痛める、過呼吸、など

<救急車要請の事例>

平成15年4月29日（火） 男子選手

11:40ころ 頭部に蹴り。転倒後、頭部打撲。直後は意識なし。約2分後に回復。安静を保ち、完全に意識回復。

12:30ころ 徐々に悪化。脈はやや弱い。
救急車要請。

12:40ころ 国立医療センターへ搬送。
当日中に退院。

<考察>

- ① 平成15年度に新ルールとなり大技のポイントがアップした。（普通の手技が1ポイントに対し、顔面（上段）への蹴り技・相手を完全に崩してからの技は3ポイントなど）顔面への蹴り技が多く、未熟な技のコントロールのため怪我が多くなった。
- ② 団体戦においては白熱戦が多く、また勝ち進むにつれ選手の疲労度も増すのでこのようなことも発生要因のひとつとなっているようだ。
- ③ 秋の新人戦では技の未発達により件数が増える傾向がある。
- ④ 元々怪我があって出場（場合によっては隠して）し悪化させるケースもある。そのため同一選手が複数回医師の治療を受ける。

3 安全対策

(1) 空手道競技用フロアマットの使用

ポリオレフィン系発砲体（厚さ15mm）を、8m×8mの試合規定コートに対し、10m×10mと余裕をもって使用。（全コート分）衝撃吸収ばかりでなく、秋の体

育館の底冷えに対し耐寒性もある。

- (2) ドクター
1大会につき医師を1名手配。
- (3) 保険加入
組手競技のみであるが傷害保険に出場選手全員加入。
- (4) 審判講習会で審判技術・資質の向上を図る
大会審判は加盟校の顧問が殆どである。選手経験を積んでいる場合においても、新ルール導入や2・3年に一部ルール変更などがあるので講習会への参加が必要。
東京都空手道専門部では年に数回、都審判講習会を実施。また9月には関東統一審判講習会（開催地：東京）に参加し、A・B・Cのランク付け試験に積極的に参加。
審判技術の向上を目指す。
組手競技においては審判が「技を取る」タイミングがポイントである。審判しだいで試合の流れが変わったり、怪我が多発する可能性がある。
- (5) 都合同練習会の実施
毎年春と秋に加盟校合同の練習会を行い、選手の技術向上と親睦を深めている。
とくに審判が加盟校の顧問で構成されており、その先生方から直接に指導・アドバイスを受けることは競技力向上と、審判の視点を伝えることで傷病・疾病を抑制できる。
- (6) 指導者の理解
一撃必殺の技？気迫のみの雑な技・捨て身の技などが最も危険である。空手道本来の技が出せるよう基本練習の充実と礼節による相手を敬う心を前提に稽古に取り組ませる。
- (7) 選手の心がけ
まずは正しい技術の修得と向上である。そして冒頭に紹介した防具類の正確な装着。
競技においてはルールを守る。
勝ち上がる層では小さい頃からの経験者が多いが、怪我が減少するとは言えない。
成長に伴い、防具類を体格に合ったものに変更していくことが必要である。
なお、ちょっとしたことで骨折や怪我につながらぬよう食事（栄養摂取）の工夫も心がけてほしい。
- (8) その他
年間5・6回の顧問会議において改善策を検討。また各大会後に顧問・審判会議の中で反省会を実施。

4 まとめ

近年の「安全対策」の強化により傷病・疾病が少しずつ減少傾向にあるようである。

安全対策を万全に立てても傷病・疾病などが皆無となることはない。

しかし「人生の中で最も大切な高校時代に、空手道が人格完成の導きとなるように。また、基礎体力向上となるように。」東京都空手道専門部では合言葉として取り組み続けて

いる。

一方、素晴らしい選手がいるが指導者・顧問がない。素晴らしい指導者・顧問がいるが少子化？により選手が入ってこない。という悩みもかかえつつある。

研究発表 フェンシング競技における部員確保とその問題点

藤村女子高等学校 道 山 京 子

1. はじめに

「個性」を生かしながら、「生きる力」を育む活動として、貢献し、また評価されてきた「クラブ活動」も、「クラブ離れ」「運動部離れ」が話題にされて久しい。世の少子化の流れだけではなく、様々な原因がそこにはあると思うが、何に付けても活気に満ちた活動のためには、数の力は欠かせない要素である。現在私が所属しているフェンシング専門部は、ここ数年加盟校数、加盟人数が徐々に減少してきており、今後が心配な状況にある。ちなみに、本校（藤村女子高校）フェンシング部の例をあげると、昭和47年に創部されて以来、部員数がマイナーな競技でありながら、50人を越える時代から、20～30人で活動していた年が長く続いていたが、10年ほど前から減り始め、現在は8名の部員で活動をしている。本校を含め専門部の活動を活発にするためには、部員確保が絶対条件である。

そこで、部員確保のための問題となることは何かを調査し、発表することにした。

《 参 考 》 東京都高体連フェンシング専門部の加盟校・加盟人数変遷

年 度	平成 7	8	9	1 0	1 1	1 2	1 3	1 4	1 5	1 6
加盟校数	2 2	2 4	2 2	2 1	1 8	2 0	2 3	2 0	2 0	1 6
加盟人数	2 0 6	1 9 2	1 4 3	1 6 8	1 8 8	2 0 4	1 7 5	1 7 9	1 6 8	1 5 5

2. 調査方法及び結果

本校でフェンシング部が敬遠される原因は、活動費用（主に、用具費）がかかること、と言うのが生徒の多くから聞かる。そこで、他校のフェンシング部の加入状況、および用具の購入状況を主にアンケート調査してみた。競技をする以上、試合に出たい、勝ちたいと思うのが当たり前である。フェンシングの試合に出るためには、ルールにあった用具を当然使用しなくてはならず、その用具は下記の通りである。

個人が身に付けるもの：

電気剣・マスク・ユニフォーム上下・プロテクター・グローブ・シューズ・ハイソックス・メタルジャケット・ボディコード（女子は堅い素材で出来た、胸パット）

試合場（ピスト）に用意し選手が使用するもの：

電気審判器・リールのセット

(1) 東京都高体連加盟校対象アンケートの結果から

昨年、11月27・28日に行われた、新人戦の会場にて各校の顧問の先生方にアンケートを依頼した。このときの回答は、7校であった。以下は主な結果である。

- ・「フェンシング部の加入状況をお答え下さい。」
 - 増加している。 1校(14%) あまり変化はない。 2校(29%)
 - 減少している。 4校(57%)
- ・「増加しているのは、どの様な理由だとお考えですか？」
 - 練習が比較的楽で、高校からの新しい部活として入りやすい。
- ・「減少しているのは、どの様な理由だとお考えですか？」
 - フェンシングと言うスポーツ自体知られていない。
 - フェンシング競技の魅力が、理解されていない。
 - 用具が高価である。
 - 存在をアピールする場が少ないため。
 - 現代の生徒が魅力と感ずるスポーツのイメージに合っていない。
- ・「部で用意している用具に○を付けてください。」
 - 審判器・リール 7校(100%) 電気剣 5校(71%) メタルジャケット 4校(57%)
 - マスク・プロテクター・ボディーコード 2校(29%) グローブ 1校(14%)
- ・「部員が個人で用意している用具に○を付けてください。」
 - ユニフォーム上下・グローブ・シューズ 7校(100%) マスク・プロテクター・
 - 電気剣・ボディーコード 5校(71%) メタルジャケット 4校(57%)
- ・「用具がある程度、部で用意されていたら、フェンシング部への加入が増加すると思いませんか？」
 - 増えると思う。 1校(14%)
 - 影響はあまりないと思う。 6校(86%)
- ・「部活動を活性化させるため、部員数を増やすことは必要な要素だと思いますか？」
 - 必要だと思う。 7校(100%)
- ・「部活動を活性化させるためのご意見をお聞かせ下さい。」
 - 練習場の確保。
 - 学校説明会等でデモンストレーション的な事を見せる。
 - 一部の学校を除いては、指導者の問題を抱えている。
 - 大学や地域のクラブ・スクールとの連携が必要だと思う。

以上の結果から、部員確保のためには用具に費用がかかるという問題の他に、次のような問題や課題が浮かび上がってきた。

- ① 指導者の問題（顧問のフェンシング経験）
- ② 大学や地域のクラブ・スクール等との連携の問題
- ③ 部員確保のための試み

そこで、再度アンケート調査を行った。この調査には平成16年度関東高体連フェンシング専門部に登録している、58校にアンケートを郵送し協力を依頼し、43校から回答があった。以下は主な結果である。

(2) 関東高体連加盟校対象アンケートの結果から

東京と同じ質問と、東京の結果を基に違う内容を含めて行なった。数値は東京を含む関東1都7県のものである。

- ・「フェンシング部の加入状況をお答え下さい。」
 - 増加している。 6校(17%) あまり変化はない。 18校(51%)
 - 減少している。 11校(31%)

- ・「増加しているのは、どのような理由だとお考えですか？」
 - 練習が比較的楽で、高校からの新しい部活として入りやすい。
 - 活動が定着し、校内における認知度が高まった。
 - 男女共学かの影響。
 - 勧誘に力を入れている結果。
 - 毎日の練習を努力している。
 - 生徒の主体性、自主性を尊重していることをアピールしていることの成果。
 - ホームページ等での部活紹介の成果。

- ・「減少しているのは、どのような理由だとお考えですか？」
 - フェンシングと言うスポーツ自体知られていない。
 - フェンシング競技の魅力が、理解されていない。
 - 用具が高価である。
 - 存在をアピールする場が少ないため。
 - 生徒の活動意欲の減少。
 - 進学強化の影響により、学校全体がクラブ離れ。
 - 現代の生徒が魅力と感じるスポーツのイメージに合っていない。

- ・「部で用意している用具に○を付けてください。」
 - 審判器 30校(86%) リール 31校(89%) 電気剣 18校(51%)
 - メタルジャケット 24校(69%) マスク 15校(43%) グローブ 5校(14%)
 - プロテクター 10校(29%) ボディーコード 17校(49%) ユニフォーム上下 7校(20%)

- ・「部員が個人で用意している用具に○を付けてください。」
 - ユニフォーム上下 27校(77%) グローブ 33校(94%) シューズ 34校(97%)
 - マスク 20校(57%) プロテクター 22校(69%) 電気剣 25校(71%)
 - ボディーコード 18校(51%) メタルジャケット 13校(37%)

- ・「顧問の経験年数をお答え下さい。」
 - 1年目 5名(12%) 5年未満 9名(22%) 10年未満 6名(15%)
 - 10年以上 21名(51%)

- ・「先生ご自身は、フェンシングの経験がお有りですか？」
 - ある・若干ある 19名(46%) ない 22名(54%)

- ・「先生の顧問としての役割をお答え下さい。」
 - 校内で技術指導も含め全般的に指導している。 16名(40%)
 - 技術指導はコーチ・外部クラブに任せ、学校生活との調整及び生徒指導。 23名(56%)
 - その他。 1名(2%)

- ・「顧問としてお困りの問題をご記入下さい。」
 - 部員不足、部員確保 7校
 - 技術指導が出来ない 6校
 - 校務多忙のため、指導の時間が充分取れない 6校
 - 用具・資金調達・個人負担の多さ等金銭的な問題 6校

- ・「部員確保のため、工夫していることがありましたら、お書き下さい。」
 - 入学時期の部活紹介・デモンストレーション・体験入部の実施 22校
 - ポスター・ビラの配布・ホームページ等での部活紹介 6校
 - 用具等の補助 4校
 - 高校から始めても、試合で活躍できる・試合遠征が経験できる 4校
 - 中学時代の運動経験等をふまえ、生徒個人個人に勧誘活動を行う 5校
 - 積極的に、中学校に勧誘活動を行う 3校

- ・「大学や地域のクラブ・スクール等との連携について、ご意見をお聞かせ下さい。」

大学や地域のクラブ・スクール等で定期的に合同練習を行っている（週1～毎回）
17校

地域のクラブ・スクールの生徒を預かっている 2校（引率顧問）

また、次のような意見が記入されていたので、ご紹介します。

視野が広まる機会となる。社会性を育てるのに有効。高校のアピールや宣伝になり入部者を増やせる。強くなりたい生徒の欲求に答えられる。部員数が少なく、校内での練習が意味をなさない場合に有効。と言ったプラス面の意見と、逆に、生活指導面でマイナスもあるのではないか。また、試合運営上の点から、もっと高体連組織の中で、出来るだけ運営する工夫も必要ではないか。

3. まとめ

2回のアンケートをまとめた結果が下記の通りである。

(1) 用具購入について

フェンシング競技を行う以上、さきに紹介した服装・用具は、自分を守り、相手を守るために欠かすことは出来ない。しかし、生徒個人の負担を軽減する、または、余分に費用がかかっていると、感じさせないための工夫として、卒業生に用具を寄付してもらい、新入部員に貸し出せるようにする。本人の競技者としての意識が高まり、自分の用具が必要だと感じた時に購入すれば、余分に費用がかかったと言う感じも軽減するはずである。

(2) 指導者の問題

アンケートの結果、54%の先生が、フェンシングの経験が無く顧問をなさっており、そのため、技術指導が出来ないとお困りになっているようである。フェンシングを経験した教員がいないことの問題を、部員確保の面から考えると、技術指導が出来ないと言う以上に、マイナーで認知度の低いフェンシングと言うスポーツの魅力を生徒にアピールする、と言う点が弱くなることにある。しかし、ご自身はフェンシングの経験はないものの、長年顧問として、フェンシングに携わっている先生は、その間に生徒の活動を通して、フェンシングの魅力を感じて頂けたり、他校との情報交換が出来る横の関係が作られたりして、その経験が部活動や部員確保に還元できるのではないだろうか。東京都高体連の場合、フェンシングの経験のない先生も、試合運営の際、本部の仕事を経験のある先生方で指導しあい、他校の顧問と交流できるような体制にしている。そんな雰囲気から顧問を長く続けてくださる中で感じてくださった、フェンシングの魅力を部員確保に役立てていただければと考える。

(3) 大学や地域のクラブ・スクールとの連携の問題

(2)で述べたように、フェンシング経験が無く、技術指導が出来ない、単調な練習になってしまうなどと悩んでいる顧問には、強くなりたいと思う生徒の欲求を満たせるし、また、部員数が少なく、実質的な練習が出来ない学校の、練習場所確保という意味からも、今後より一層連携が必要になると思われる。

(4) 部員確保のための試み

上記(1)～(3)のほかに実際部員が増加している学校は、具体的にどの様なことを行っているか、アンケートから見ると、顧問が積極的に新入生のみならず、中学にも出かけ勧誘活動を行っている。また、現代の生徒の気質を考えたアピールの仕方を行っている。更に今後はホームページ等での部活紹介なども、各校のみならず、東京都高体連専門部でも検討が必要と考える。

マイナーでありながら、服装や用具に費用がかかる、フェンシングというスポーツの活性化を図るため、各校で部員を確保するためにどの様なことをしているのか、何をしたらよいのかをまとられればよかったのだが、明確な結論は出せなかったが、現状が把握できたこと、また、

東京だけでなく他県の現状を知ることが出来たことで、今後の部員確保ための手がかりが少し見えてきた。ご協力ありがとうございました。

研究発表

東京都におけるユースサッカーリーグの実践報告

～DUOリーグの創設(1996)から公認リーグ準備過程(2004)まで～

筑波大学附属高等学校 中塚 義実

1. はじめに

おそらく熱心な高体連指導者は、その多くが自ら高校時代、熱心に運動部活動に取り組み、技能の修得はもとより、かけがえのない思い出や一生付き合える仲間を得て、いまも携わっておられる方だろう。報告者もその一人である。中学時代は教師主導の“熱血”運動部、高校時代は生徒主体の“民主的”運動部、そして大学では100人の大所帯で全国一を争う“伝統的”運動部と、タイプの異なる学校運動部にお世話になり、サッカーのプレーだけでなく、様々なことを学ぶことができた。自分自身の“スポーツ観”の一部と、“スポーツ習慣”の大部分は、20世紀の学校運動部の中で形成されたことは間違いない。

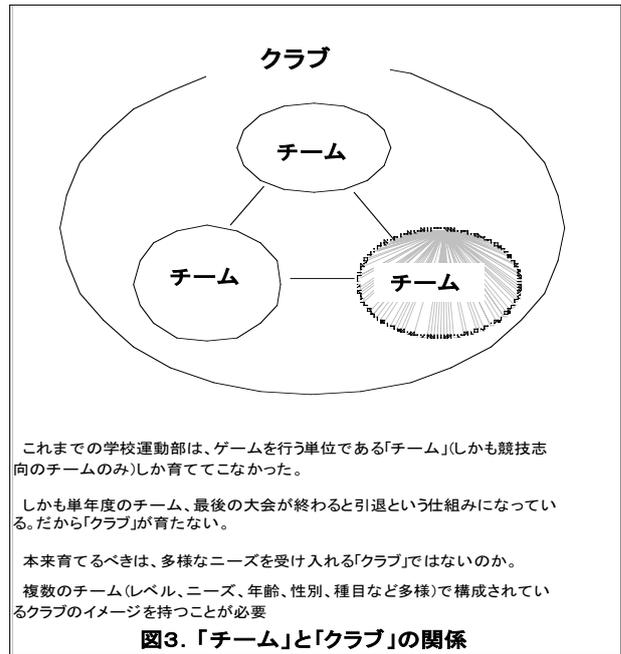
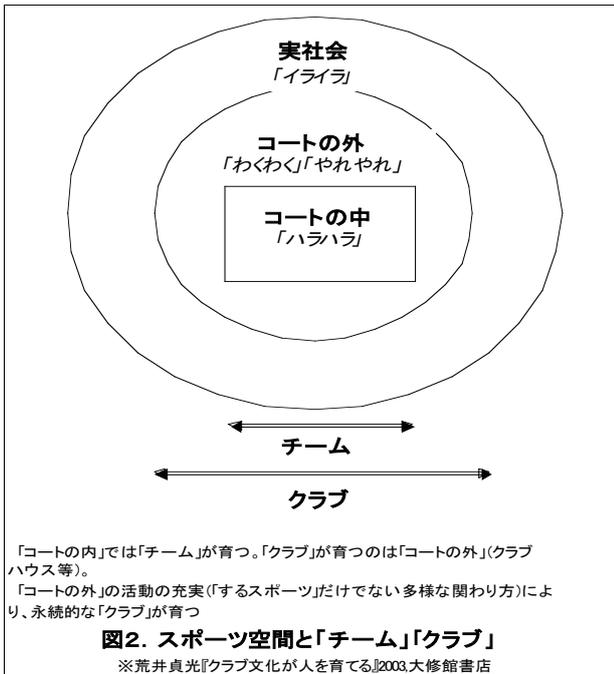
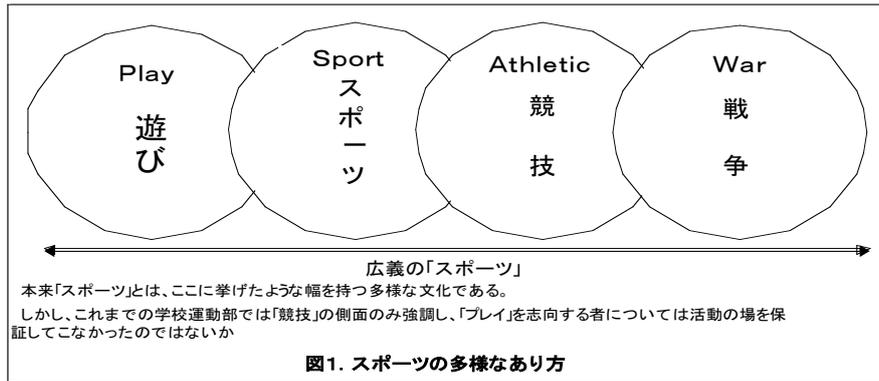
しかし、指導者になってからを含め、これまでの運動部体験を振り返ると、「これでいいのか」という疑問と、それに対する試行錯誤の繰り返しであった。スポーツ社会学を修め、「スポーツとは何か」「これからの社会においてスポーツはどうあるべきか」を研究する中で、「これでいいのか」に対する回答は徐々に整理されてきたが、それでも日々の現場においては、理論だけでは通用しない現実の厳しさや、“習慣を変える”ことの困難さに直面する毎日である。例えば、学校運動部において「当たり前」のように思われ、習慣化されている次のようなことがらが、ここで報告する試みの問題意識となっている。

- 1) 「最後の大会」が終わると、(アマチュアなのに)「引退」して、(15歳や18歳なのに)「OB (Old Boy)」「OG (Old Girl)」と自称する。 → 「競技」志向の「チーム」(しかも単年度)しかないから、アマチュアなのに引退となる。目指すは“引退なし”のスポーツライフ
 - 2) テスト1週間前に部活動が禁止になり、3年生の入試前に長期間のブランクがある → 日常生活にスポーツも勉強も位置づいていない。“両立”できていないから途切れ途切れになる。目指すは“歯磨き感覚”のスポーツライフ
 - 3) 一つの学校に一つのチーム。100人いても1チーム。人数足りないと大会参加すらできない(「合同チーム」もその場しのぎの対応に過ぎない) → チームワークのみ。クラブワークなし。目指すは“補欠ゼロ”のスポーツライフ
 - 4) 付き添いも、技術指導も、マネジメント全般についても、全てを教員がやっている(それで「大変」「忙しい」と言っている) → 学校が抱え込みすぎ(家庭・地域が学校に依存しすぎ)。卒業生、地域の人材、そして何より子どもたち自身の運営能力に期待したい。目指すは“ささえる”スポーツライフ
 - 5) 誰も使っていない学校施設がある → 学校の施設は誰のものなのか。「学校」である“時間”と“空間”を整理して有効利用したい。目指すは“開かれた”スクールライフ
- 本報告は、スポーツの観点からみた高校生年代のスポーツシステム改革の試みである(図1)

～4 参照)。“学校運動部のため”にはじめたわけではない。“高校生のため”“スポーツのため”にはじめたことが、結果的に、参加している学校運動部に大きな影響を及ぼしているというのが実状である。

学校でできることは限られている。何ができて何ができないかを整理することが大切である。文京区・豊島区から始まった「DUOリーグ」の小さな試みの範囲でなら「できる」ことが、東京都全域に広げて組織化・公認化しようとしたときに「できない」ようになることもある。あわせて報告したい。

報告者は、DUOリーグ・チェアマンとして、この試みの発端から関わるとともに、2003年度までは(財)東京都サッカー協会(TFA)のユースリーグ準備委員長として、U-18 東京都サッカーリーグの準備に携わってきた。この試みが多くの方に理解していただき、サッカー以外にも波及することを願ってやまない。



これまでのスポーツ観	→	これからのスポーツ観
チーム	→	クラブ
選手	→	プレーヤー
多くの「補欠」を生むシステム	→	「補欠ゼロ」のスポーツシステム
「競技」志向	→	「プレイ-スポーツ-競技」多様なあり方
「大会」中心	→	「日常生活」中心
トーナメント	→	リーグ
「引退」のあるスポーツライフ	→	「引退なし」の生涯スポーツライフ
単一種目を年中行う	→	複数種目をシーズンごとに行う
「する」のみのスポーツライフ	→	「する・みる・語る・ささえる」多様なスポーツ
単一の価値観に集約するシステム	→	多様な価値観を認め受容するシステム
学校・企業	→	地域

図4. これまでのスポーツからこれからのスポーツへ
~このような方向性で、「スポーツ」を、スポーツの「場」を、そしてスポーツ好きな「人」を育てていくことが大切なのではないかと~

(財)日本サッカー協会公認B級指導者養成講習会・共通科目「スポーツの社会科学」配付資料(2004)

29 **DUOリーグの理念**

1. 「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフー サッカーの生活化
日常生活にサッカーが無理なく位置づけられる

2. DUO(デュオ)リーグとは何か

DUOリーグは、東京都文京区・豊島区(現在は足立区も含む)の高校サッカー部とクラブユース連盟(CY連)加盟クラブ^{注1)}で組織した私的サッカーリーグである。1996年の発足当時は高体連5、CY連1の計6クラブから10チーム^{注2)}が参加して1リーグ制で行われていたが、徐々に加盟数も増え、2004年度後期リーグでは高体連25、CY連2、それに文京区と豊島区の中学生選抜を含めた29クラブが加盟し、1部8チーム、2部8チーム×3ブロックで行われている。人数の多いクラブからは複数チームが参加できるし、複数クラブの合同チームでもかまわない。試合の際に「責任能力のある大人(各クラブの責任において定める)」が付き添うことと、指定された試合を行い、審判を派遣できること(高校生が資格を取得して笛を吹くことを奨励している)、グラウンドを1節分^{注3)}確保できる(公共施設等の借用も含む)こと、そして参加費を1チームあたり各期2万円支払うことが参加チームに課せられた義務である。参加費は審判手当等の運営経費に充てられる。優秀審判賞をはじめ、ささえる活動に対する評価は惜しまない。

DUOリーグのあゆみ⁽²⁰⁰³⁾

1996 DUOリーグ発足

前期 4~7月	10チーム/1リーグ制(スタート) 加盟クラブ: 昭和(和) 筑波大附(2) 小石川(2) 京華 向丘 三菱養和SC 試合会場: 筑波大附 小石川 (三菱養和)	優勝: 京華高
後期 9~12月	16チーム/2リーグ制(変則1部、2部制) 新規加盟: 学習院高等科 豊南高校 1部は各クラブの代表チーム 2部はその他のチーム(特別枠選手制度導入) 試合会場: 筑波大附 小石川 学習院 (三菱養和) ・文京区中3選抜が参加。以後、後期のみ参加する ・筑波大附と京華の2軍が連合軍で参加 ・特別枠選手(19歳以上)は3名まで可(10日の活動の場となる) ・大会参加費を徴収(1チームにつき15,000円)	優勝: 三菱養和SC

1997より良いサッカー環境を構築し、全国へ情報発信す

前期 4~7月	18チーム/2リーグ制(変則1部、2部制) 新規加盟: 本郷高校 1部は各クラブの代表チーム 2部はその他のチーム(特別枠選手制度導入) 試合会場: 筑波大附 小石川 本郷 (三菱養和)	優勝: 昭和一高A
後期 9~12月	15チーム/2リーグ制 均等に2つに分けてリーグ戦 両リーグの同順位同士が順位決定戦 今期の順位により、後期から1部、2部制導入 試合会場: 筑波大附 小石川 本郷 (三菱養和)	優勝: 三菱養和SC

1998①普遍性の追求=どこでもできるようにシステム化 ②DUOリーグの発展=より良いサッカー環境の構

前期 4~7月	16チーム/2リーグ制 均等に2つに分けてリーグ戦 両リーグの同順位同士が順位決定戦 今期の順位により、後期から1部、2部制導入 試合会場: 筑波大附 小石川 本郷 (三菱養和)	優勝: 小石川高A
後期 9~12月	20チーム/1部、2部制 新規加盟: 城西高校 豊島学院高校 1部8チーム 2部は均等に2つのリーグに分け、同順位同士が順位決定戦 1部下位3チームと2部上位3チームは入れ替え(3位同士は入れ替え戦) 試合会場: 筑波大附 小石川 本郷 (三菱養和) 茨城県茨城町	優勝: 三菱養和SC

1999①レベルに応じた環境づくり-入れ替え制度 ②リーグ単位の自主運営制度

前期 4~7月	20チーム/1部、2部制 1部8チーム 2部は6チームずつ均等に2つのリーグに分け、同順位同士が順位決定戦 1部下位3チームと2部上位3チームは入れ替え(3位同士は入れ替え戦) 試合会場: 筑波大附 小石川 本郷 学習院 三菱養和	優勝: 小石川高A
後期 9~12月	24チーム/1部、2部制 新規加盟: 都立部高校 豊島区中学生選抜(後期のみ) 1部8チーム 2部は8チームずつ均等に2つのリーグに分け、同順位同士が順位決定戦 1部下位3チームと2部上位3チームは入れ替え(3位同士は入れ替え戦) 試合会場: 筑波大附 小石川 本郷 三菱養和 茨城県茨城町	優勝: 小石川高A

DUOクラブ(加盟クラブ)は高体連やCY連にも加盟し、それぞれの公式戦にも参加する。公式戦や学校行事の合間を縫って、前期は4~7月、後期は9~12月に行われ、これがシーズンを形成する。1~3月はオフシーズンからプレシーズンとなり、年間を通しての活動サイクルが確立した。もちろん週末のゲームは、1週間の活動サイクルの柱となる。試合結果は「DUOリーグ通信」やホームページ<<http://www.duoleague.com>>で伝えられ、DUOリーガーの励みになっている。

大切なことは、DUOリーグの理念を全員が共有し、理念の実現へ向けて活動していくことである。DUOリーグの理念は、「これからのスポーツ観」に示したことを別の形で表現したものである。

3. DUOリーグの成果と広がり

DUOリーグに関わりながら、DUOリーガー(高校生)は、スポーツの日常性や多様性を満喫しているようである。早期に「引退」宣言していたある進学校では、3年生までサッカーを続けるようになった。最後の大会が終わって目標を失っていた高校3年生も、練習頻度は低

20002001年度と東京都ユースサッカーリを創設すべく行動を開始する

前期 4~7月	20チーム/1部、2部制 1999年度と同様の形式 24チーム/1部、2部制 新規加盟: 駒込学園 1999年度と同様の方式	優勝: 三菱養和SC 優勝: 三菱養和SC
------------	--	--------------------------

2001①東京都ユースサッカーリーグを早期に実現すべく行動を継続する ②DUOリーグ「IT革命」元年とする ③「FCDUO」構築の可能性について検討する

前期 4~7月	21チーム/1部、2部制 新規加盟: 豊島高校 東京大学(Bチーム) 1部9チーム(東京大学が1部から参加のため) 2部は6チームずつ均等に2つのリーグに分け、1位同士が2部チャンピオンシップ 1部下位3チームと2部上位2チームが自動入れ替え(後期は1部8チーム) ・試合会場は、筑波大附、小石川、本郷、学習院、京華(さいたま市)、三菱養和に、新たに東京大学農学部グラウンドが加わった ・三宅高校サッカー部員9名が「京華B」としてリーグ期間を通して出場。特別賞受賞	優勝: 学習院A
後期 9~12月	25チーム/1部、2部制 新規加盟: 立教池袋高校 1部8チーム、下位2チームが自動降格 2部は6チーム×3リーグ、1位同士プレーオフを行い、上位2チームが自動昇格	優勝: 東京大学

20021. 組織としてのDUOリーグを確立する

前期 4~7月	26チーム/1部、2部制 新規加盟: 東海高校 都立豊島高校(計20クラブ) 1部8チーム 2部は6チーム×3リーグ、1位同士がプレーオフを行い、上位2チームが自動昇格 ただし、後期リーグに東京大学不参加、2部上位3チームが自動昇格となった ・富士スポーツ財団の「SFSスポーツエイド」支給事業に ・チャスマン、事業部と管理部に分かれて業務を分担する仕組みになる ・DUOリーグボランティアの誕生 ・試合会場は、筑波大附、小石川、本郷、学習院、京華(さいたま市)、三菱養和・東京農学部に、新たに都立豊島高校グラウンドが加わった	優勝: 本郷A
後期 9~12月	29チーム/1部、2部制 新規加盟: 淑徳巣鴨高校(計21クラブ) 1部8チーム、下位2チームが自動降格、上位2チームが次年度「上位リーグ」に昇格(予定) 2部は7チーム×3リーグ、1位同士プレーオフを行い、数チーム(未定)が自動昇格 ・DUOリーグ保険へ全員加入 ・DUOリーグトレーナー制度開始。会場にトレーナーが帯同 ・DUOリーグ選抜、定期的な活動開始	優勝: 三菱養和

2003“当事者意識”を高め、「DUOリーガー」を、「DUOクラブ」を、「DUOリーグ」を、そして「東京都ユースリーグ」を育てよう!

前期 4~7月	24チーム/1部、2部制 新規加盟: なし(計21クラブ) 1部8チーム 2部は8チーム×2リーグ、昇降格については、2004年度からの東京都ユースリーグの動向をみながら判断する 三菱養和と本郷Aは「P.Jリーグ(プレ上位リーグ)」で活動	優勝: 本郷B
後期 9~12月	34チーム/1部、2部制 新規加盟: 2部区別リーグ(東京都1~3部の下位リーグ)としてオフィシャル化(ただしプレ大会) 従来の文京区・豊島区に加え、足立区・中央区を含めて再編(1部は10チームの変則開催となった) 新規加盟: 村東、日大豊山、文京、豊立、都立立、都立北、都立学園(20クラブ) 東京都2部で足立学園、本郷A、三菱養和、小石川が、3部で豊島、日大豊山がプレ大会に参加	優勝: 京華A

下するが、12月までプレーしている。1年生も4月から出場できるし、1年生対象の「フレッシュマンリーグ」もある。審判を志す者は積極的に笛を吹くし、審判講習会に参加して資格を取得する。各校のマネージャーも、学校を越えてプログラム作成に取り組んでいる。もちろん定期的なゲームはレベルアップに貢献するし、選手の発掘と育成の場として「DUOリーグ選抜」の活動もある。高いレベルを志向する者にはそれなりの受け皿があり、公式戦への出場機会が少なかった者にも試合出場の機会が与えられ、モチベーションが上がってきた。何と云っても彼らが皆、生き活きとサッカーを楽しんでおり、卒養後も、ボランティアや指導者としてこの活動に携わる傾向がみられるようになったのがうれしい限りである。

2000年度には、「東京都ユースサッカーリーグ創設」をDUOリーグの活動方針に掲げ、新たな取り組みをはじめた。「東京都高体連サッカー科学研究会」^{注4)}においてもユースリーグが議題の柱となった。学校関係以外の方々との情報交換の場は「サロン2002」^{注5)}の月例会で何度か設けられ、ユース年代へのリーグシステム導入の気運を盛り上げた。

一方、全国レベルの強豪校同士でも、1990年代後半から私的なリーグ戦が行われるようになっていた。こうした状況を踏まえ、スポーツ本来のあり方からユース年代のサッカーの仕組みを見直す必要があるとのことで、JFA内でも中学・高校生年代へのリーグシステム導入が議論されるようになった。筆者は1996～99年にかけて、JFA第2種検討委員会の委員として、高校生年代のサッカー環境のあり方を議論する場にあり、委員会内でリーグシステムの重要性について提案した。同委員会の委員長に上野二一氏（都立日比谷高校教諭。前任の都立小石川高校時代にDUOリーグを経験）が就任した1998年頃からリーグ化構想は大きく進展し、「高円宮杯」^{注6)}の改革と連動して、全国9地域単位での「プリンスリーグ」^{注7)}を2003年度より開始することになった。2002年FIFAワールドカップ後にJFA会長（キャプテン）に就任した川淵三郎氏が示したミッションの中にも、各都道府県でユースリーグを組織することが示され、9地域リーグの次は各都道府県リーグであるという気運が全国的に芽生えはじめた。こうした気運の芽生えは、強豪校同士の私的リーグの存在や、DUOリーグの草の根の試みなどが様々なメディアに取り上げられ、紹介された^{注8)}ことも影響しているだろう。また、JFAの指導者養成講習会などを通して、全国各地のサッカー指導者にこの試みを伝える機会を持つことができたことも一つの要因として挙げられる。

2001年度に、都高体連サッカー専門部の中で組織された「ユースリーグ検討委員会」は、同年後期には、DUOリーグをモデルとした「プレリーグ」を都内8地区で展開、2002年度はこれを年間を通して展開し、計192チームが参加した。2003年度前期には、東京都全域での「PJ（プレ上位）リーグ」^{注9)}を試みた。

ただしここまではあくまでも私的なリーグである。

4. 公認リーグ準備過程－学校教育活動とスポーツ活動の狭間で

底辺からのこうした試みを「公認化」することで、より多くの理解を得、仲間を増やしていこうということから、高体連・CY連のメンバーで「TFAユースリーグ準備委員会」を組織し、2004年度からの公認リーグ開始へ向けて具体+な準備に取り掛かったのが2002年度である。シーズンを明確化して前後期制で行うこと、レベル別リーグを組織し、底辺は近場で、レベルが高くなるにつれて広範囲を行き来すること、リーグ加盟はあくまでも自由意志であることなどを原則として準備を進めた。そして、各リーグ8チーム構成で、1部リーグの下に2部が2ブロック、3部が4ブロック、その下に各地区リーグが存在する形を提示した（この段階でDUOリーグは、第2地区リーグとしての性格を有するようになった）。都内202クラブ（うち高体連188、CY連13、その他1）が加盟し、289チームが参加するリーグ構成も定まり、2004年2月末に、TFA主催の「U-18東京都サッカーリーグ」の創設が、TFAの安田一男会長を招いて開かれた設立総会にて宣言された。

しかし3月初旬、公認リーグは突然中止となる。

「公認化」とは、一つはサッカー協会による公認、もう一つは教育関係の公認を指す。前者に関しては、既存の競技会とのスケジュール調整、選手登録、警告・退場などの情報管理など

実務上の課題があったが、大きな方向性として「ユース年代にリーグ戦を」との流れがあったので、時間はかかっても打開できる見通しがあった。一方、教育関係との調整も並行して進められたが、都教委や都高体連との調整は難航していた。

結局、次の3つの課題がクリアーになっていないとの指摘をもとに実施委員会で判断し、2004年度からの公認化を断念せざるを得なかった。それは、1) 都立高校教員の服務、2) 都立高校のグラウンド使用、3) 生徒の参加について、いずれも「学校教育活動と判断できるだけの材料がそろえられなかった」ということである。

もともと「学校運動部のためにはじめたのではない」としていたユースリーグも、参加単位は「学校」である場合がほとんどであり、その場合、学校の教員や施設を動員し、生徒の安全を保障するには「学校教育活動」と認定できるかどうかは欠かせない。地域の「スポーツ活動」としての加盟を考えていたCY連加盟クラブからすれば、「学校教育活動」が理由となるこの判断は大きな驚きであったろう。学校の論理とスポーツの論理の間に、依然として大きな隔たりが存在することを改めて感じさせられるできごとであった。

5. 今後の展望

2004年度は、準備していたリーグ戦を、練習試合の組織化という形で行った。DUOリーグは、公認化されなくても何ら変わることなく行われたが、公認化を目標に進んできたいくつかのリーグにおいては、モチベーションを失って組織基盤が揺らいだところもあれば、逆に、さらに強固な組織として成長したところもある。ただ、足並みは乱れた。

2005年度中に関東各都県でリーグを組織化することが確認されていたこともあって、U-18東京都リーグの再編成は急務であった。新メンバーで準備委員会が編成され、「U-18プリンスリーグ関東」につながる「U-18東京都トップリーグ」の準備が、現在も進められている。「トップリーグ」の名にふさわしい、一定の条件をクリアーした、高体連及びCY連加盟クラブのみが参加するリーグ戦である。底辺のリーグは、地域リーグの組織が残っているところを中心に展開し、組織が残っていないところは、新たに、自由な組み合わせでリーグを組織してよいとなっている。

日常生活にスポーツを根付かせるための仕組みとして、リーグシステムは不可欠である。これは、学業との両立が求められる高校生には特に求められるところであろう。

しかしそれは、学校教育だけで担えるものではないし、担うべきでもない。むしろ、スポーツの側が主体となってささえなければならぬ。それは、学校を活かしながら、卒業生や地域社会が基盤となってスポーツをささえる仕組みであり、長い目で見れば、自ずと「チームからクラブへ」の方向性になろう。「スポーツ振興基本計画」も示すこれからのスポーツ環境は、リーグシステムと並行して進められるはずである。

学校教育が高校生のスポーツに関して為すべきことは、もっと他にあるはずである。まずは体育の授業を充実させ、スポーツ教育をしっかりと行うことである。そして、学校体育施設を充分活かしながら、多様なニーズを持つ生徒に、スポーツの多様な楽しみ方を享受させられるような部活動のあり方を模索することである。高体連研究部は、学校教育の理念とスポーツの理念の間に立って、時代に即した学校体育と学校運動部のあり方を提案していく重要な使命を担うと考える。

※本報告は、日本スポーツ教育学会第24回大会シンポジウム「学校と地域をつなぐスポーツ教育」(2004年9月)における「スポーツ観の見直しを！ーリーグ戦がクラブを育てるー」を再構成したものである。DUOリーグについてはこの他、日本スポーツ産業学会第7回大会(1998年7月.)、日本スポーツ社会学会第11回大会(2002年3月)においても報告し、各学会において、新しい試みとして注目されている。

<注一覧>

注1) JFAは年齢別登録制度を採用しており、高校生は「第2種」で、高体連とCY連の2つの組織がある。2004年度は、東京都高体連加盟校320、準加盟5、CY連加盟のU-18ク

ラブは 14 あった。

注 2) ここで言う「クラブ」はリーグへの加盟単位で、学校運動部や C Y 連加盟クラブがこれにあたる。一方「チーム」はリーグ戦へ参加する（ゲームを行う）単位である。チームとクラブの関係は図 2 に示した。

注 3) 同時開催できる試合のまとまりを「節」と呼ぶ。8 チームでリーグ構成した場合、1 節は 4 試合で成り立ち、7 節で一巡する。原則的に週末に各節が設けられるので、日程消化には 7 週間必要で、各チームが 1 節分（4 試合）グラウンドを確保すれば運営できる（むしろグラウンドは余る）計算が成り立つ。

注 4) 都高体連サッカー専門部の委員を中心に組織された私的研究会。1995 年度より活動を始め、毎月の例会は 2005 年度中に 100 回目を迎える。

注 5) サッカー・スポーツを通して 21 世紀のゆたかなくらしづくりを“志”とする、ゆるやかなネットワーク。1980 年代後半から、J F A 科学研究委員会（現在は無い）の委員を中心に調査研究を行っていた組織が、1997 年度に「サロン 2002」として組織化され、今日に至る。様々な形でスポーツに携わる会員が全国に約 130 名おり、毎月 1 回の月例会はこの 3 月で 100 回を数える。<http://www.salon2002.net> 参照。

注 6) 高体連と C Y 連が公式戦で唯一競い合う競技会で、1990 年に始まった。J F A 主催。2004 年度からは「プリンスリーグ」の上位チームによる大会となり、サンフレッチェ広島ユースがジュビロ磐田ユースを破り優勝した。過去 15 回のうち、高体連加盟校が優勝できなかったのは、2004 年度を含めて 2 回のみ。

注 7) 全国 9 地域ごとに行われる第 2 種年代のリーグ戦。2003 年度より全国各地でスタートし、高体連、C Y 連の垣根なく、春先から秋口まで行われる。

注 8) 例えば全国紙では、日本経済新聞（2001 年 6 月 23 日夕刊）や読売新聞（2002 年 3 月 30 日）が、スポーツ情報誌では『月刊トレーニングジャーナル』（2002 年 5 月号～7 月号）や『コーチングクリニック』（2002 年 11 月号）が、D U O リーグの試みを紹介している。

注 9) 2002 年度後期の各地区リーグ上位による、東京都全域の私的リーグ戦。「P J」（プレ上位）リーグ」と名付け、来るべき公認リーグの「運営のトレーニング」として、試験的に 2003 年度の前期のみ行った。

< 主要参考文献 >

菊幸一、「近代プロスポーツ」の歴史社会学—日本プロ野球の成立を中心に、不味堂出版、1993

日下裕弘、日本スポーツ文化の源流、不味堂出版、1996

中塚義実、「スポーツ」の側から学校運動部を見直そう！、

月刊体育科教育、49(6)、2001 年 6 月号

中塚義実、補欠ゼロ・引退なしのサッカー部、月刊体育科教育、50(4)、2002 年 4 月号

全体講評

東京都教育委員会 教育庁指導部指導企画課統括指導主事 鯨岡 廣隆

東京都高等学校体育連盟「研究部」規約

第一章 名称及び事務局

- 第1条 本研究部（以下「本部」という）は、東京都高等学校体育連盟研究部と称する。
第2条 本部の事務局は会長指定の高等学校におく。

第二章 目的

- 第3条 本部は東京都高等学校体育連盟が教育活動の一環として実施する体育・スポーツ活動に関する調査並びに研究を行い、その発展に寄与することを目的とする。

第三章 事業

- 第4条 本部は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
1) 競技力向上、普及振興、安全対策に関する調査研究
2) 研究会並びに講習会の開催
3) その他本部の目的達成に必要な事項

第四章 組織及び委員

第5条 本部は各競技専門部及び定通制部から選出された委員を以て組織する。
委員の任期は2カ年とし、再任は妨げない。

第五章 役員

第6条 本部に下記の役員をおく。
1) 部長 1名
2) 副部長 2名 (1名は委員長及び本連盟の常任理事を兼ねる)
3) 常任委員 7名
4) 監事 2名

第7条 役員は委員会において選出する。

第8条 役員の仕事

- 1) 部長 部長は本部を代表し、会務を統括する。
- 2) 副部長 副部長は部長を補佐し、部長事故ある時はその職務を代行する。
委員長を兼ねる副部長は会務を執行する。
- 3) 常任委員 常任委員は会務の企画、運営にあたる。
- 4) 監事 監事は本部の会計を監査する。

第9条 役員の仕事は2カ年とし、再任は妨げない。補充によって就任した場合は、前任者の残任期間とする。

第六章 会議

第10条 委員会は委員を以て構成し、必要事項を審議決定する。

第11条 常任委員会は役員を以て構成する。常任委員会は部長が招集し、必要事項を審議する。
なお、緊急事項が生じた場合は常任委員会で審議決定し執行する。執行内容については委員会に報告しなければならない。

第七章 会計

第12条 本部の経費は、本連盟の一般会計・研究部費、その他を以てこれにあてる。

第13条 本部の会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第八章 附則

第14条 本規約は、本連盟常任理事会の議決を得て変更することができる。

第15条 本規約は、平成13年11月16日より施行する。

役員を選出に関する細則

- 1) 部長は都内高等学校長より選出する。
- 2) 副部長2名(1名は委員長及び常任理事を兼ねる)は委員の互選により選出する。
- 3) 常任委員は委員の互選により7名を選出する。
(団体種目系3名、個人種目系2名、武道系2名)
- 4) 委員は各専門部・定通制部の互選とする。(各専門部より1名、定通制部より1名)
- 5) 監事は委員の互選とする。

<研究部>

組織と名簿

2004年

役職名	氏名	専門部	勤務校	〒	所在地	電話	FAX	専門部役職	研究部
部長	佐治恒孝		都立富士	164-0013	中野区弥生町5-21-1	03-3382-0601	03-3382-8224		
副部長 (委員長・会計)	草木繁生	陸上競技女子	都立小金井工業	184-8581	小金井市本町6-8-9	042-381-4141	042-382-8130	副 常任	第三
副部長 (副委員長)	田中茂好	体操男子	都立鷺宮	165-0033	中野区若宮3-46-8	03-3330-0101	03-3339-8420	副 常任	
常任委員	松田宣之	バレーボール女子 (団体種目系)	都立武蔵村山	208-0035	武蔵村山市中原1-7-1	042-560-1271	042-560-8691		第一
"	家村誠也	ラグビー (団体種目系)	都立赤坂	107-0062	港区南青山2-33-77	03-3402-6621	03-3402-6803		第三
"	中塚義実	サッカー (団体種目系)	筑波大付属	112-0012	文京区大塚1-9-1	03-3941-8236	03-3943-0848		第三◎
"	中島昭雄	バドミントン (個人種目系)	文化女子大杉並	166-0004	杉並区阿佐ヶ谷南3-48-16	03-3392-6636	03-3391-8272		第二
"	松原通雄	登山 (個人種目系)	東亜学園	164-0002	中野区上高田5-44-3	03-3387-6331	03-3387-6335		第二
"	内海秀一	柔道 (武道系)	都立北園	173-0004	板橋区板橋4-14-1	03-3962-7885	03-3962-7680		第一◎
"	柳 清司	剣道 (武道系)	都立足立東	120-0001	足立区大谷田2-6-5	03-3620-5991	03-5697-0272		第三
監事	家弓明丈	テニス	都立小金井工業	184-8581	小金井市本町6-8-9	042-381-4141	042-382-8130	部 常任	第一
"	金澤宏一	少林寺拳法	都立小金井工業	184-8581	小金井市本町6-8-9	042-381-4141	042-382-8130	副 常任	第三

氏名	専門部	勤務校	〒	所在地	電話	FAX	専門部役職	研究部
◎内海秀一	柔道	都立北園	173-0004	板橋区板橋4-14-1	03-3962-7885	03-3962-7680		常任委員
松田宣之	バレーボール女子	都立武蔵村山	208-0035	武蔵村山市中原1-7-1	042-560-1271	042-560-8691		常任委員
安原正樹	ソフトボール	日出	153-0063	目黒区目黒1-6-15	03-3492-3388	03-3492-4518		
福永哲哉	スキー	日本大学第三	194-0203	町田市園師町11-2375	042-793-2131	042-793-6804		
奥秋将史	水泳	都立玉川	158-0094	世田谷区玉川1-20-1	03-3700-4110	03-3700-9219		
中根和広	レスリング	日工大付東京工	153-8506	目黒区駒場1-35-32	03-3467-2130	03-3467-2245		
家弓明丈	テニス	都立小金井工業	184-8581	小金井市本町6-8-9	042-381-4141	042-382-8130	部 常任	監事
小野寺 裕	ウェイトリフティング	東亜学園	164-0002	中野区上高田5-44-3	03-3387-6331	03-3387-6335		
山崎哲男	ボクシング	都立南平	191-0041	日野市南平8-2-3	042-593-5121	042-593-1442		
井上昭雄	自転車競技	城北	174-8711	板橋区東新町2-28-1	03-3956-3157	03-3956-9779		
佐藤智尚	なぎなた	文化女子大杉並	166-0004	杉並区阿佐ヶ谷南3-48-16	03-3392-6636	03-3391-8272		

氏名	専門部	勤務校	〒	所在地	電話	FAX	専門部役職	研究部
◎山下和秀	空手道	目黒学院	153-8631	目黒区中目黒1-1-50	03-3711-6556	03-3713-7448		
村岡保利	ソフトテニス男子	東京	146-0091	大田区鶴の木2-39-1	03-3750-2635	03-3750-2644		
渡辺昂史	卓球男子	都立武蔵丘	165-0031	中野区上鷺宮2-14-1	03-3999-9308	03-3926-9012		
嘉屋公明	卓球女子	武蔵野	114-0024	北区西ヶ原4-56-20	03-3910-0151	03-5567-0487		
中島昭雄	バドミントン	文化女子大杉並	166-0004	杉並区阿佐ヶ谷南3-48-16	03-3392-6636	03-3391-8272		常任委員
乃美弘樹	弓道	都立晴海総合	104-0053	中央区晴海1-2-1	03-3531-5021	03-3531-5024		
糟谷 一	ホッケー	東学大付属	154-0002	世田谷区下馬4-1-5	03-3421-5256	03-3421-5152		
松原通雄	登山	東亜学園	164-0002	中野区上高田5-44-3	03-3387-6331	03-3387-6335		常任委員
高城彰吾	ボート	学習院高等科	171-0031	豊島区目白1-5-1	03-3986-0221	03-5992-1016		

氏名	専門部	勤務校	〒	所在地	電話	FAX	専門部役職	研究部
◎中塚義実	サッカー	筑波大付属	112-0012	文京区大塚1-9-1	03-3941-8236	03-3943-0848		常任委員
松岡保雄	陸上競技男子	都立東大和	207-0015	東大和市中央3-945	042-563-1741	042-565-0781	副 常任	
草木繁生	陸上競技女子	都立小金井工業	184-8581	小金井市本町6-8-9	042-381-4141	042-382-8130	副 常任	委員長
野々内幸則	体操男子	都立狛江	201-8501	狛江市元和泉3-9-1	03-3489-2241	03-3489-9321		
森田純一	体操女子	都立農芸	167-0035	杉並区今川 3-25-1	03-3399-0191	03-3399-3996		
大串明彦	男子バスケットボール	明大付属中野	164-0003	中野区東中野3-3-4	03-3362-8704	03-3368-3113		
矢野士郎	女子バスケットボール	都立目黒	153-0052	目黒区祐天寺2-7-15	03-3792-5541	03-3792-5945		
清水則康	バレーボール男子	法政大第一	180-0002	武蔵野市吉祥寺東町3-5-7	0422-20-8141	0422-21-4633	副	
戸崎秀之	ソフトテニス女子	都立杉並工業	167-0023	杉並区上高田5-44-3	03-3394-2471	03-3394-6299	副 常任	
永岡英之	スケート	武蔵野	114-0024	北区西ヶ原4-56-20	03-3910-0151	03-5567-0487		
東 宏治	軟式野球	創価	187-0024	小平市鷹の台2-1	042-342-2611	042-344-5988		
家村誠也	ラグビー	都立赤坂	107-0062	港区南青山2-33-77	03-3402-6621	03-3402-6803		常任委員
樋口道夫	ハンドボール	都立調布北	182-0011	調布市深大寺北町5-39-1	0424-87-1860	0424-83-7081	副 常任	
梶原成年	アメリカンフットボール	正則学園	101-8456	千代田区神田錦町3-1	03-3295-3011	03-3295-6220	副	
柳 清司	剣道	都立足立東	120-0001	足立区大谷田2-6-5	03-3620-5991	03-5697-0272		常任委員
満留久摩	相撲	都立足立新田	123-0865	足立区新田2-10-16	03-3914-4211	03-3911-1692		
佐々木孝彦	ライフル射撃	明大付属中野	164-0003	中野区東中野3-3-4	03-3362-8704	03-3368-3113	副	
道山京子	フェンシング	藤村女子	185-8505	武蔵野市吉祥寺本町2-16-3	0422-22-1266	0422-22-7680		
恩田好久	アーチェリー	文京学院大女子	113-0021	文京区本駒込6-18-3	03-3946-5301	03-3946-5368	副 常任	
金澤宏一	少林寺拳法	都立小金井工業	184-8581	小金井市本町6-8-9	042-381-4141	042-382-8130	副 常任	

氏名	専門部	勤務校	〒	所在地	電話	FAX	専門部役職	研究部
松田宣之	バレーボール女子	都立武蔵村山	208-0035	武蔵村山市中原1-7-1	042-560-1271	042-560-8691		第一、常任
安原正樹	ソフトボール	日出	153-0063	目黒区目黒1-6-15	03-3492-3388	03-3492-4518		第一
乃美弘樹	弓道	都立晴海総合	104-0053	中央区晴海1-2-1	03-3531-5021	03-3531-5024		第二
糟谷 一	ホッケー	東学大付属	154-0002	世田谷区下馬4-1-5	03-3421-5256	03-3421-5152		第二
佐々木孝彦	ライフル射撃	明大付属中野	164-0003	中野区東中野3-3-4	03-3362-8704	03-3368-3113	副	第三
道山京子	フェンシング	藤村女子	185-8505	武蔵野市吉祥寺本町2-16-3	0422-22-1266	0422-22-7680		第三
阿部正彦	事務局長	都立駒場	153-0044	目黒区大橋2-18-1	03-3466-1288	03-5738-5377		